

次に、杜甫草堂から歩いて15分程度の距離にある「青羊宮」に向かった。少し歩いていると、歩道の中央に片手に槍をもち、顔は隈取し昔の戦争の時に身に着けていたような服を着た大男が仁王立ちしていた。近寄ると、「張飛牛肉」というお店の看板の前で客寄せパンダになっている。

お店の名前といい、京劇に出る張飛の姿に似せた男といい、やはりここは三国志ゆかりの街だけのことはある。一緒に写真を撮らせてもらい、握手をして、それだけでは悪いのでお店の中にはいり「牛肉干」を買った。一口サイズの干した牛肉であるが、これがとてもおいしい。私はこれが好きで中国に行くたびにお土産で買ってくる。

また少し歩くと小さな川があり、そこに「送仙橋」という名の石橋が架かっている。欄干には動物などの彫刻が施されている。何気ない風景であるが、日本では観光地にでも行かねばこのような気の利いた橋はない。その点中国はどこに行っても、見るだけで安らぎを与えてくれる石の橋が多い。いつか町田市長へのハガキに、「町田市内にある橋はどれもコンクリートとガードレールのような欄干の橋ばかりであり、風情がない。多少お金がかかっても架け替え時は特徴のある石橋にしてほしい。そうすれば観光客も増えるのではないか。」と書いたが、これといった特徴のない町田市にとってこのアイデアは如何であろうか。そんなことを思いつつ街路樹の下を歩いていると、青羊宮の前に来ていた。

青羊宮は道教の寺院である。日本では道教の寺院はあまり聞いたことがないが、中国をあちこち旅行する度に道観(道教の寺院)を見ることがあり、中国民衆に深く根を下ろしていることがわかる。

10元を払って境内に入ると、大勢の人がお参りしており、三清殿という本殿らしき建物の前には線香を立てる灰の入った三方のような金属製の大きい箱が置かれていて、そこからもうもうと線香の煙が立っている。日本の線香と違い中国の



張飛牛肉店の前で、張飛と仲良くツーショット



青羊宮の入り口

それは巨大であり、直径5センチ、長さ1メートルを上回る線香も多い。何でも大きいものの好きな国民性のなせるわざか。

三清殿のすぐ脇に銅製のヤギが左右に置かれ参拝者を迎えてくれる。これは、道教の始祖の老子が青いヤギを連れていたという伝説に基づくものらしい。

このヤギは災厄を祓う神羊とされているので、参拝者はみなそれに触れたがり、為に表面は黄金色に光り輝いている。私も負けずに頭をなでてきた。よく見ると片方のヤギの角は一つで、もう片方のそれには二つある。一角のヤギはなんとなくヤギらしくない。友達の説明によると、それは十二支の動物の一部を取り入れて作ってあるという。なるほど顔は馬で、足のつめはトラ、目はうさぎという具合である。あご髭があるところがヤギということらしい。

そういえば「竜」は、中国史の開祖として名高い

〈黄帝〉が天下統一を果たした折、あたらしいテーマとして世界のどこにもない威風堂々とした動物を臣下に考えさせたものと、何媛媛さんの著書「蒼海拾貝」で後日知った。竜は、頭は馬、体は蛇に魚の鱗、鹿の角にイノシシの鼻、象の牙という具合にできているとは知らなかった。竜とヤギの話は何か通じるものがある。

青羊宮の起源は周代(BC1046年頃～BC256年)というからやはり中国の歴史は長い。一説によると老子の生没年は不詳であるが、紀元前6世紀頃道教の基礎を築いたといわれるので、そのころ最初の寺院らしきものが建てられたのかもしれない。

今夕は川劇などのショーを見に行くことにしている。川劇とは、ご存じの京劇と並ぶ中国八大地方劇の一つだ。「川」は四川省の別称である。青羊宮を出たが、ショーまでまだ時間があるので成都市で一番有名でにぎやかな「春熙路」周辺を散策することにした。東京でいえば銀座に相当する場所である。

大通りに出たところに大きな百貨店がいくつかあったので、中に入ってみた。通りを挟んで、「王府井百貨」と「太平洋百貨」があった。どちらもありっぱな百貨店で銀座あたりのそれと引けをとらない。「王府井百貨」のほうがすこし高級で、商品もどれも高い。買う人がいるのかなと心配するほどだったが、地方都市でも市民の購買力が格段に上がったということなのか。ブランド品が多く、おそらく中国人のご婦人方のプライドを満たしているのであろう。

あちこちぶらぶらしながら私が驚いたのはいくつもの道路が広いだけでなく、3～4車線の車道のほかにオートバイや自転車専用道があり、さらに歩道も完備している通りがとても多いことである。そして緑地帯でそれぞれの専用道を分けてあるためとても安全である。緑地帯には木々がしっかり植えられていて、緑の豊かな街のイメージを与えている。このように計画的に都市改造したのはいつの頃だか知らないが、先見の明があったと言えきであろう。

陽も西に傾き、あたりも薄暗くなってきたのでタクシーにのり、ショーの行われる場所

に向かった。目的地は、「蜀風雅韻」という名の劇場である。有名らしく、ガイドブックには次のように紹介されている。〈成都屈指のハイレベルなショーが行われる。劇団員のレベルは成都随一とされ、特に変臉、手影戯、伝統楽器の独奏は見事である〉。

私が特に見たかったのは、「^{biànlǎn}変臉(変面)」である。この技は川劇が誇る絶技の一つで、その技は中国の第一級国家機密とされているようだ。テレビでは見たことがあるが、目の前で見るとこの度が初めてである。手やマントで顔を覆った瞬間、開くと異なるデザイン、異なる色の隈取に顔面が変化している。どうみても人間業とは思えない。最後の素顔に至るまで5～6回は変化した。さらに驚いたのは、逆に素顔から隈取の顔に変って行ったのである。素人考えでは順に素顔に至る流れは、顔を覆っている(と思われる)カバーを外していけば可能と理論的には思うが、その逆というのは全く想定外であった。

三百年の伝統があるというが、一体誰が考案した技なのか。この変臉はショーのクライマックスに行われたのだが、次に紹介するショーはいずれも観客を興奮させるのに十分であった。

まずは「^{gǔndēng}滾灯」。これは「ぐんだん」と呼ばれるコメディ劇である。一組の夫婦が登場するのだが、話の設定は麻雀で帰宅が遅くなった夫を妻がお仕置きするもので、頭に火のついたローソクを乗せられた主人が妻の言われるままに椅子をくぐったりするアクロバチックな演技をするのである。それだけでなく二人の漫才のような軽妙なやりとりや表情に会場は大いに沸いていた。「カ



四川大学の広いキャンパスでくつろぐ筆者

カア天下」は上海女性の専売特許と思っていたら、四川の女性も有名らしい。つぎに「手影戯」であるが、簡単に言えば「影絵」である。ただし只の影絵ではない。直径2メートル前後の丸いスクリーンに浮かぶ影絵は、生き物の息遣いが聞こえるかのような素晴らしさで、とても人間業と思えない。厳しい修行に裏打ちされた芸という感じがする。観客も息づまるような思いでスクリーンをじっとみつめていた。プロの技であった。最後にもう一つ紹介したいのは、「^{nazi}唸子独奏」である。唸子とはチャルメラをいう。日本では夜鳴き蕎麦屋や豆腐売りが吹く楽器と相場が決まっているが、ここでの唸子の七色の音色、変幻自在のメロディは私の先入感を一気に吹き飛ばした。ともかく一度聞いていただくほかない。この劇場の入場券は安くはなかったが、成都の夜を十分堪能させてくれた。

日が改まり、いよいよ王さんと再会する日(2月1日)となった。午後1時にホテルに来られるので、午前中はまず四川大学に向かった。この大学には友人のMさんが1995年に短期留学されたと聞いていたので、この機会に是非見ておこうと思ったのである。中国の大学は、どこもキャンパスが広くゆったりとしている。この大学も正門を入ると、大きく育ったプラタナス並木が奥に向かって伸びている。突き当りは大きな池となっていて、周囲にベンチが置いてあり学生たちが本を読んだりしていた。都心にある日本の大学とは違って静かで落ち着いていた。

成都に行くまで知らなかったが、ガイドブックに四川大学に隣接して「望江楼公園」という有名な公園があり、薛涛ゆかりの地と書いてあった

ので20元払って中に入った。すると一面に竹林が広がっていてやはり成都是パンダが住みよいところなのだと実感する。この公園は、既述の錦江の川沿いに展開している。公園の名前となった「望江楼」は四重の塔で錦江を見下ろすように

立っている。各層の屋根は、それぞれ造りが異なっていて一ある階は四角形、ある階は八角形というように一本来ならバランスの悪い建物となろうが、なぜか一体感を感じさせ川面にもきれいに映えている。正式には「崇麗閣」という名前があるが、望江楼の名前で通っているようだ。

そこからすぐのところに「薛涛井」がある。これは、彼女が晩年この近くに住み、自ら考案した深紅の詩箋である「薛涛箋」を漉いた井戸であるという。私は、この女流詩人を今回の旅で初めて知ったのだが、簡単に彼女の生涯を紹介したい。彼女は、768年に長安に生まれた。李白や杜甫よりすこし遅れて生まれたが、ほぼ同じ時代を生きた。役人の父とともに任地の成都に移った。しかし14～5歳のころ父が死に、母と貧しい少女時代を過ごした。生活のため17～8歳ごろ妓女となった。美貌の上、才気にあふれていた彼女は地方長官に見いだされ、宴席に列しては白居易、杜牧など当時の有名詩人と詩の献酬をしたそうである。そして前述のように薛涛箋を生業とし、75歳まで生きたという。

書家でもあった。中国は、歴史上に名を残す女性の詩人や作家が少ないが、その中にあるのは記憶に留むべき女性と思われる。ほかにもこの公園には薛涛の石像、お墓、記念館などがあり、いつかまたゆっくり来てみたいと思った。(続く)



薛涛の石像



薛涛井の記念碑